

福井県版ポジティブ教育プログラムの実践

—小中一貫校開校に向けての学校支援—

教育相談センター

有田留美子 仲野聡美

教育相談センターでは、学校支援、教師支援を目的として、平成30年度から「持続可能な幸福を育む学校づくり」を実現するために地域全体で取り組むプログラムの作成を行い、令和元年度に「福井県版ポジティブ教育プログラム」を完成させた。このプログラムは、地域全体で児童・生徒に「幸福を自ら創り出していく力」を育てることを目的とし、ソーシャルスキル教育、ピア・サポート活動およびレジリエンス教育を柱とした三つのプログラムで構成されている。福井県教育振興基本計画（令和2～6年度）の「2. いじめ・不登校対策の充実」では、不登校の防止対策の一つとしてポジティブ教育の研修や各学校における実践を促進していくことが盛り込まれ、当センターでは、希望する地域で実践研究を進めている。これまでの「学校サポートプログラム」の活用事例研究で得た知見を生かし、学校や地域の実態に応じてプログラムの実践を支援している。ここでは、令和3年度に小中一貫校として開校予定の地域での実践について取り上げる。

なお、本実践にあたり、特別研究員として立命館大学教職大学院の菱田準子教授から、指導・助言を得た。また、今年度までの実践については「研究紀要第125号」に掲載している。

〈キーワード〉 ポジティブ教育 レジリエンス教育 ピア・サポート活動 小小連携 小中連携

I はじめに

県内では、少子化に伴い、今後ますます小・中学校の統廃合が進むことが予想され、統合の際には、地域や校区内で共通する学校づくりの指標や手立てが必要となる。当センターでは、地域全体で取り組むことを目的とした福井県版ポジティブ教育プログラムの実践が有効な手立てとなると考え、県内初の施設一体型小中一貫校としての開校を予定している角鹿中学校区（角鹿中学校、敦賀北小学校、赤崎小学校、咸新小学校）を特別研究協力地域とし、昨年度から3年計画で実践に取り組んでいる。

昨年度は、校区内の教員の共通理解を図るために小・中学校合同の研修会の実施や、所員によるソーシャルスキル教育およびピア・サポート活動を柱としたプログラムの実践を行い、支援してきた。

昨年度の課題としては三つ挙げられた。

課題① 今後の明確な方向性および年間の見通しを学校や校区内全体で共有できなかったこと

課題② 教員の意識や理解に差が見られ、学校全体で協働した取組みが不十分だったこと

課題③ 児童・生徒や学級の実態に合わせた授業実践が難しかったこと

これらの課題を受けて、今年度は次の三つの方向性で取り組んだ。

方向性① 推進体制を構築し、機能させていくこと

校区内でポジティブ教育推進者を発足させ、具体的な方向性を示す。それをもとに小小連携、小中連携を意識して4校が足並みを揃えて取り組んでいけるようにプログラムの実施計画と実践の共有を行う。

方向性② 継続的に研修を実施すること

校区内全体で、育てたい児童・生徒像を見据え、同じ目的をもって取り組むことができるように各校の実情に合わせた研修を実施する。

方向性③ 教員によるプログラムの授業実践を支援すること

教員がねらいを理解して児童・生徒や学級の実態に応じた授業を実践するために、所員による継続的な支援を行う。

本稿では、今年度の実践について記述し、開校となる来年度に向けての課題を明確にしたい。

II 実践の概要

1 研究協力地域について

角鹿中学校区は、めざす生徒像を「他とのかかわりの中で新たな課題を持ち、よりよい自分へと向かう生徒」とし、平成28年度より、9年間の学びのつながりを重視した小中一貫教育を進めている。小中一貫校開校に向けて、児童・生徒同士の支え合いを可能とした集団づくりを目指し、ポジティブ教育を各校のスクールプランに位置づけ、同一歩調で推進し、4校の教員の連携および指導力の向上に取り組んでいる。

今年度は、4校全てで、ポジティブ教育の価値である「5大栄養素」(文末資料1)、指標である「THRIVE」(文末資料2)を意識して、ピア・サポート活動、レジリエンス教育を実践するにあたり、校内研究会やポジティブ教育推進者会で話し合いながら、実践研究を進めた(文末資料3)。

2 研究協力地域の課題

小学校3校は、いずれもクラス替えのない単学級の学年構成であり、安定した人間関係という小規模校の利点がある反面、小規模校特有の人間関係の固定化や、人間関係力の構築といった課題がある。来年度より小中一貫校として校舎やクラス環境が変わることに不安を感じている児童もいる。また、中学校卒業後、それぞれが新しい環境や集団へ対応していく力を生徒に身につけさせていく必要がある。

3 実践の概要

(1) ポジティブ教育推進者会の実施

ポジティブ教育推進者会は、各校1名ずつの推進者で構成し、所員も加わって、校区内における全体の推進計画と実践の共有を行った。

8月の推進者会では、中学校の推進者からピア・サポート活動の実践について紹介があり、小学校の推進者はピア・サポート活動について具体的なイメージをもつことができた。各校で学校行事を生かしたピア・サポート活動を適宜実践していくことを確認した。また、全ての学級でレジリエンス教育の授業を担当が実施することを計画した。小学校では、小小連携を意識してどのように授業づくりを進めていくかについて話し合った。

12月の推進者会では、各校の推進者から実践内容を報告し合い、成果と今後の課題について共有した。また、来年度の小中一貫校での教育課程において持続可能な取組みとなるように、年間計画での位置づけを確認した。今年度は、コロナ禍において推進者会議の回数を増やすことは難しかったが、オンライン会議やメールを活用して適宜打合せや相談を行うことで継続的な支援を行った。

(2) 継続的な研修の実施

校区内全体で、育てたい子ども像を見据え、同じ意識をもって取り組むことができるように、各校の推進者と話し合い、必要に応じて研修を実施した。

年度初めは、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、休校期間中に所員が福井県版ポジティブ教育プログラムの概要について研修動画を作成し、各校の教員が視聴した。小学校3校については、全職員が共通理解をするために、推進者が質疑内容を集約し、所員が文書で回答した。

また、プログラムの概論の理解については、本研究所の通信型研修の視聴を勧めたり、授業実践に向けた研修については、演習や話し合い活動を中心とした訪問型研修を行ったりするなど、学校の実情や目的に合わせて研修の在り方を工夫した。

さらに8月には、特別研究員の菱田教授を講師とし、県内の実践地域を対象としたポジティブ教育研修会をオンラインで開催し、角鹿中学校区の教員も参加した(図1)。菱田教授からは「持続可能な幸福を自ら育む子どもを育成する～ポジティブ教育の進め方～」と題して理論と演習を中心に研修が行われ、「教師自身が自分の人生を最も価値のあるものにする生き方、自己教育力が問われている」と指導者の心得について話があった。研修の後半には、各実践地域での実践内容や地域全体で取り組む方法について、参加校同士で質問し合ったり、共有したりすることができた。角鹿中学校区の教員からは、「実際に自分達もワークシートに書き込みながら取り組んだり、いくつかの指導例を紹介していただいたりして、今後の教育活動に役立った。」という感想があった。



図1 Zoom会議を活用した研修会

(3) 小学校でのプログラム実践

① 3小合同打合せの実施

レジリエンス教育の授業実践に向け、ポジティブ教育推進者会で話し合ったところ、レジリエンス教育の実践が初めての取り組みであるため、担任の不安が大きいということや、小学校3校とも単学級であるため、同学年の担任同士でレジリエンス教育の教材研究をすることの困難さが推進者から挙げられた。そこでまず、所員が3小合同打合せの開催を提案し、小学校3校で同学年の担任が連携できるよう、推進者と話し合って、各学年1名ずつ担当者を選出した。各学年の担当者は、3校のうちの1校に偏ることのないよう、各校数名ずつ選出した。8月には、小学校3校の担任、関係者全員が集まり、10月下旬からの実践に向けての打合せを行った(図2)。打合せでは、授業の実施時期や教材共有の確認などが行われた。所員も参加し、教員の質問に対して、助言をしたり提案をしたりした。



図2 3小合同打合せ

② 学校行事を生かしたピア・サポート活動の取り組み

ソーシャルスキル・トレーニングで付けた力を般化させることが昨年度の課題であった。そこで今年度は、ソーシャルスキル・トレーニングで付けた力を生かしたピア・サポート活動を展開することを、所員がポジティブ教育推進者会で提案した。推進者より意見が出され、以下のことを確認した。

- ・どの学校も体育大会の中でピア・サポート活動を行う。
- ・推進者がワークシートの形式を提示し、他の教員が活用できるようにする。
- ・各学校、各学年で、ピア・サポート活動が実施可能な行事(校外学習、異学年交流等)で適宜行う。
- ・所員が必要に応じて研修等でサポートしていく。

推進者会を受けて、各校のニーズに応じた、所員によるピア・サポート活動についての研修を行った。敦賀北小学校では、ピア・サポート活動を進める際の留意点について詳しく伝えた。咸新小学校では、それぞれの学年で行事の中でピア・サポート活動をすでに実践しており、そこからの教員の振り返りをもとによりよい活動にしていくための質疑応答を行った。赤崎小学校では、教師のプランニングに所員も参加し、適宜提案をした。10月の体育大会では、小学校3校ともにピア・サポート活動を取り入れて実践した。まず、担任がクラスの実態を分析し、体育大会を通してどのような児童を育てたいかを考え、昨年度学んだソーシャルスキルの中から、目標達成に必要なスキルを選んでプランニングした。次に、教師のプランニングをもとに、児童が具体的にどのような目標で体育大会に臨みたいか、そのためには仲間のためにどのような行動をするとよいかを考えて、児童自身のプランニングを行った(図3)。活動の途中で中間振り返りを行い、上手くいっている児童からのアドバイスを参考にしたり、必要なスキルトレーニングを行

ったりすることで、達成率の向上を図った。体育大会本番後に全体の振り返りを行い、今後の目標を確認した。また、ピア・サポート活動をした児童の自己有用感が上がるよう、サポートされた学年がサポートした学年へ感謝の気持ちを伝える「ありがとうカード」を送った。

③ レジリエンス教育の授業実践

菱田教授から提案された指導案および動画やワークシート等の教材を使って、10月下旬から各学年4時間ずつの授業を担当が行った。授業者は、実践した各4時間の授業について、工夫したところおよび児童の反応を記録し、今年度の反省を行うことで、来年度の実践に生かせるようにした。所員は、指導案検討に参加したり、授業参観後に授業者と共に振り返りを行ったりした。以下に特記すべきことを記述する。

ア 研究会の実施

【敦賀北小学校】

敦賀北小学校では、第2学年の「怒りをしずめる方法」、第3学年の「コントロールできるものとできないもの」の授業を公開し、角鹿中学校区内の教員で参観して、研究会で検討を行った(図4・5)。全員がレジリエンス教育に取り組んでいることで、活発な話し合いとなった。

菱田教授からは、「施設一体型の小中一貫校の強みとして、小1から中3までの児童・生徒が同じ建物の中に一緒にいるという高いリソースがある。小1から中3までの児童・生徒が互いに日常でどのように関わっていくことができるかを考えることができる。『ポジティブ』など共通の言葉を使って児童・生徒も教師も分かり合っていける環境づくりができる。掲示物や教材等、共有できるものが多くあることも強みである。」等の助言を得た。

【咸新小学校】

咸新小学校では、第3学年の「コントロールできるものとできないもの」、第6学年の「自分の困りごとを解決しよう」の授業を校内の教員全員で参観した。参観者は、色分けした付箋に、「良かったところ」や「改善点」などを記入していった。事後研究会では、指導案の流れに沿って、全員が付箋を元に活発に話し合いを進め、レジリエンス教育についての理解を深めていた(図6)。

【赤崎小学校】

赤崎小学校では、担任全員と所員との定期的な振り返りの時間を設定した。担任は児童の実態に合わせた授業展開をしてどうだったかを振り返り、日常への般化に向けての手立てを所員と共有した。また、次時のレジリエンス授業に向けての話し合いも行った。

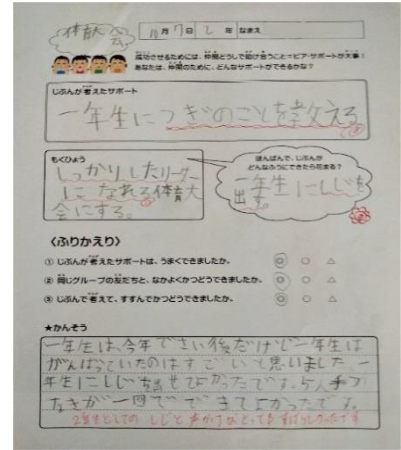


図3 児童のプランニング



図4 公開授業



図5 研究会



図6 事後研究会

イ 学校公開日での実施

小学校3校の保護者に向けた学校公開日で、半数以上の学級がレジリエンス教育の授業を公開した(図7)。保護者は児童の活動を熱心に参観していた。授業で行った演習を、家族でやってみたいと教材の共有を申し出た保護者もいた。以下に、参観した保護者の感想の一部を抜粋する。



図7 保護者に向けた学校公開

- ・「レジリエンス教育」、初めて聞きました。これから子どもがいろんな経験をしていく上でいろんな感情に対してどう対応していくかはとても大切なことだと思います。まだ3年生には難しく感じることもあるかもしれませんが、何もかもポジティブに捉えすぎないようにすることも、バランスをとることも重要だと思います。(自分にとって都合の良いようにしか受け取らない。)つらい、悲しい感情もしっかり受けとめた上で、ポジティブに変えることが大切だと思います。子どもたちに分かりやすいように伝えてくださっていました。ありがとうございます。
- ・ポジティブ教育の内容がよかったです。子どもも良い方に考えてくれるとうれしいです。先生もたくさんほめてくださったので、みんなニコニコして楽しい授業でした。ありがとうございます。
- ・大人が聞いても難しい授業だなと思いましたが、これから生活していく上で必要なことだと思います。よい勉強をしているなと思いました。

ウ 小小合同授業の実践

これまで、小学校3校合同の同学年での授業を、全学年が年1～3回程度行ってきた。しかし、今年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、小6のみ、角鹿中学校で1回行った(図8)。その際に、ポジティブ教育は校区全体で取り組んでいく大切な学習だということを児童が感じられるよう、各学年4時間のレジリエンス授業のうちの第1時「レジリエンスを知ろう」を小小合同で実施することを所員が提案した。座席は他校の児童が隣り合うよう、授業者が配慮していた。アイスブレイクやシェアリングを他校の児童同士でさせたことで、自然な形で関わり合い、考えを深め合うことができた。また、本時を小中の多くの教員が参観し、教員同士の取組みを共有することができた。



図8 小小合同授業

(4) 中学校でのプログラム実践

① 年間計画表の作成

年度初めに推進者である研究主任と所員とでスクールプランをもとにポジティブ教育プログラムの実践について年間計画表を作成していった(図9)。新型コロナウイルス感染症の影響で一斉休校となり、授業時間数の確保などから制約が多かったが、必要な現職教育や研究体制について具体的に考えていくことができるように、今年度重点的に実践していくことを次の2点に絞った。



図9 各学年での授業計画作成

- ・今ある学校行事や授業、教育活動の中でピア・サポート活動を学校全体で実践していく。
- ・担任によるレジリエンス教育の授業実践を後期の指導主事訪問に重ねて実践していく。

また、所員の提案により、各学年が学校全体の年間計画表をもとに学年における年間計画表を作成した。計画表には、各学年部会で目の前の生徒にどのような力を育成していきたいのかを考え、学年目標や目指

す生徒像、行事と絡めたピア・サポート活動の実践計画、授業やその他の活動での取組みを書き込めるようにし、集団の実態に合わせて計画を立てられるように工夫した。

② 学校行事を生かしたピア・サポート活動の取組み

昨年度、ピア・サポートトレーニングを積み重ねることはできたが、生徒同士が学校生活の中で実際に支え合うようなピア・サポート活動を充実することができなかったことが課題として挙げられた。今年度は、学校行事を生かして生徒が仲間のためにサポート活動を計画し、実践、振り返りのサイクルを回していくことで、思いやりのある集団の形成を目指すこととした。新型コロナウイルス感染拡大防止のため行事の精選や縮小が見られたが、体育大会や修学旅行、学年でのレクリエーション活動にピア・サポートの視点を取り入れ、実践できるように研修を行った。

また、小中一貫校での児童・生徒同士の支え合いを実現していくために、小中連携の事業にある小・中学校の交流行事を生かして、ピア・サポート活動の実践を進めていくことを所員が提案した。角鹿中学校区では、例年、入学前の不安をなくすために中学生が小学校3校の6年児童に学校生活や部活動などを紹介し、交流を深めてきたが、昨年度の3月に予定していた会は、一斉休校により実施できなかった。そこで今年度は、中学2年生が6年児童にオンラインでの「ピア・サポートプロジェクト～お悩み相談会～」を計画し、学年で「新1年生に笑顔で入学してもらおう」と目標を設定した。中学生が事前に小学校3校の6年児童に中学校生活で聞きたいことや不安に思っていることなどをアンケートで聞き取り、その内容をもとに企画を考えていった。中学生は、サポート活動をプランニングする際に、自分が6年時に抱いていた不安や悩みを思い出しながら、どのようなサポートがあると児童が安心して入学することができるのかを考えて計画を立てていた。オンラインでの交流活動が初めての試みとなるため、「マスクで6年児童の表情や反応が分かりにくい」や「4校での接続となり、音声聞き取りづらく、うまく伝わらないのではないかな」といった課題や不安が挙げられ、昨年度学んだ、非言語を大切に伝えた伝え方のスキルや相手の気持ちを考えたスキルを生かしたサポート計画を立てた。

当日の会では、説明が聞き取りやすいように中学生が工夫し、拍手やパフォーマンスで温かい雰囲気を作るなど、支え合うスキルを生かす姿が見られた。全員がピア・サポーターとなってサポート活動を実践したことで、児童・生徒共に安心して交流活動を行うことができた(図10)。また、会が終わった後も4校が統合するまでの期間に中学生が児童宛に通信を発行したり、母校へ年賀状を送ったりした。サポート活動を継続していくことで小中学校間での交流が深められた。



図10 ピア・サポート活動

③ レジリエンス教育の授業実践

菱田教授から提案された指導案および動画やワークシート等教材を使って、9月下旬から、各学年4時間ずつの授業を担当が行った。学校全体で取り組めるように推進者および所員で相談しながら計画を立て、授業研究の支援を行った。以下に特記すべきことを記述する。

ア 研究体制の工夫

レジリエンス教育の授業実践に向けて所員による現職教育を事前に実施し、レジリエンス教育の概要およびねらいについて全職員で共通理解した。その後、学年を中心とした研究グループを三つ作り、授業の実施計画案を作成していった。授業づくりについては、各グループで協議しながら取り組めるように指導案検討会、授業実践、振り返りの時間というサイクルを設定していった(図11)。所員も各グループの検討会や授業参観、振り返りの時間に加わり、学級の実態に合わ



図11 授業後の振り返り

せたレジリエンスの授業を一緒に考えていった。検討会や振り返りの時間を作ることは容易ではなかったが、教務主任および研究主任で相談し、時間割にあらかじめ組み込むことで計画的に進めることができた。また、授業を参観する時には、参観者がコメントカードに「良かった点」や「取り入れたい点」、「改善点」などを書いて授業者に渡すようにした。

イ 研究会の実施

11月には、後期指導主事訪問に合わせてレジリエンス教育の研究授業を各学年で実施し、公開授業とした(図12)。助言者として菱田教授を招聘し、分科会および全体での授業研究会を行った(図13)。分科会は学年ごとに会場を作り、指導案を拡大して色付きの付箋紙を活用したワークショップ型の授業研究会とした。事前に別のクラスでプレ授業を行っていたため、授業を参観する視点がより明確化されたことで話し合いも焦点化され、議論を深めることができた。全体会では、各分科会での内容を共有し、菱田教授からは「ピア・サポート活動の実践によって安心・安全な関係性や環境ができており、レジリエンス教育の授業にもしっかりと生かされていた。小中一貫校として、持続可能な幸福を育ていける取り組みであり、チーム学校としての期待がもてる。」等の助言を得た。授業研究会の振り返りでは、以下のような感想が出た。



図12 レジリエンス教育の授業



図13 分科会

- ・生徒自身の変容を感じられる授業展開を意識していきたい。レジリエンスの授業は、自己肯定感を高めたり生きやすさにつながったりしていると感じる。今後も継続して指導していくことが大切だと感じた。
- ・レジリエンス教育の授業は、教科の授業や道徳、日常生活の中で生かせる場面がたくさんあると思った。授業で学んだことをいろんな場面で意識させていくことで本当の力が身につくと思った。
- ・授業検討会で指導案のねらいや授業者の思いを共有し、意見を出し合うことで、多くのアイデアと価値観を得ることができた。学校全体で取り組んでいくことが大切だということが分かった。
- ・一連の授業実践では、先生方の人柄や強みを生かした授業が提案されていて、学ぶことが多かった。良き刺激ともなった。レジリエンスの授業は特に先生と子どもと一緒に学ぶという姿勢が大事であり、日々の生活場面で子どもに投げかけ、振り返らせていくことが大切だと思う。

ウ 意識の共有と発信

学校全体で取り組むためには意識の共有が必要である。推進者および所員で相談をし、レジリエンス教育のガイダンスを全校集会で行うことを計画した。「人はどんなふうになったら幸せだと感じるか」という質問では、コロナ禍における未曾有で予測困難な時代を生きる中で「当たり前の生活ができることに幸せを感じる」という意見が生徒から出た(図14)。推進者からは、持続可能な幸せを育む知恵として「THRIVE」の指標を提示し、どんな状況であっても幸福な人生を自分で創っていくためにこれから学校全体で生徒も教員も一緒に学んでいこうという説明があった。全校集会後には、「THRIVE」や「5大栄養素」のパネルを生徒玄関前に設置し、生徒がいつも目にするようにした。また、生徒玄関前には、ポジティブ教育に関する



図14 全校集会

る掲示のコーナーを作り、授業の様子やキーワードなどを掲示し、発信していった（図15）。

また、プログラムの授業実践について全教員で共有するために、所員、研究主任が相談をし、教員を対象としたポジティブ教育通信を継続して発行した。通信には小学校の取組みについても紹介し、小中連携の視点を盛り込んだ。小学校の推進者にも通信を通して中学校の実践について知ってもらえるようにした。



図15 ポジティブ教育に関する掲示物

4 結果と考察

(1) 教員対象のアンケート結果

小・中学校の教員対象にアンケート調査を行った。枠内は主な理由のみ取り上げる。（回答数 35）

① 研修が教育活動に生かされたか。

A生かされた(57%) B少し生かされた(37%) Cあまり生かせなかった(3%) D全く生かせなかった(0)
無回答(3%)

A・ポジティブ教育についての理解と必要性について深まった。

・児童に活動の中で意識的に声かけができた。

B・普段の学校生活の中でも、一人ひとりの強みを意識するようになり、子どもの良さを引き出そうとするようになった。

C・生かしたかったが、難しかった。

② 学校全体でピア・サポート活動を実践して児童・生徒や教員にどのような効果や変化があったか。

児童・全校で取り組んだので、体育大会全体が勝負のみにこだわらず温かいものになった。

・友達や異学年の子に目が向き、みんなのために何ができるかを考えるきっかけになった。

生徒・お互いを尊重し合い、助け合う姿が多く見受けられた。

・生徒の言動から恥ずかしさや不安を抱く程度が減ったように感じる。

教員・子ども同士で支え合える場面を意図的に作ることができた。

・全員が共通した言葉で指導に当たることができた。

③ レジリエンス教育の授業実践をして児童・生徒や教員にどのような効果や変化があったか。

児童・怒っている時、やりたくても上手くいかない時、どうすればよいかのHow Toが児童の中にあることで、教師と子ども達との共通認識のもと様々な場面で使え、情緒の安定の一助となった。

生徒・自分自身について考えるようになり、それを行動に移す生徒が見られた。

・相互理解が深まり、クラスの団結力が強まった。

教員・自分自身も前向きに考えたり、気持ちを切り替えたりできることが増えた。今までより長い目で子どもを見ることができるようになった。

・生徒の相談に対応する時にレジリエンス教育の授業が参考になった。

・日頃あまり目立たない生徒の頑張りや考えなど、新たな面を知ることにつながった。

- ④ 学校全体での取組みで、教員の意識や協働性は高まったか。
A高まった(43%) B少し高まった(29%) Cどちらともいえない(17%)
Dあまり高まらなかった(0) E全く高まらなかった(0) 無回答(11%)

- A・ポジティブ教育は全校や校区内全体で取り組むので一体感があつた。
・ポジティブ教育を通して共通の話題があり、教員同士で話や相談ができた。
B・一つの新しい理論に基づく実践をしていくことで各学年での授業検討会はとても活発だった。
互いの考えを尊重し合えるクリティカルな授業検討会となつて良かった。
・他の学年で行っていることを共有することで、縦の学びのつながりやピア・サポート活動の連携が取れた。
C・縦のつながりはもっとあつてもよかつたと思う。
・授業研究の話をするのは好きだが、ゆとりがなく、のめり込めなかつた。

- ⑤ 校区内での取組みで、教員の意識や協働性は高まったか。
A高まった(20%) B少し高まった(31%) Cどちらとも言えない(31%)
Dあまり高まらなかった(6%) E全く高まらなかった(0) 無回答(12%)

- A・いよいよ一貫校になるんだという気持ちが湧いてきて、これから一つの学校を一緒につくっていくワクワク感が高まつた。
・取組みの前に3小で集まり、指導について共通理解を図れた。教材を共用することで情報交換をたくさん行えた。
B・中学校の教員が小学校の授業を参観できたのは良かった。
・情報交換ができたのは良かったと思う。
C・それぞれ各校の意識は高まつたが、小中の間の連絡はまだ十分には取れていない。
・通信でしか小学校の取組みを知らなかつたのでどちらともいえない。
D・他学年は教材の作成を3校で分担していたので、そうやって協力できれば良かった。

- ⑥ 「5大栄養素」や「THRIVE」を意識した教育活動を展開できたか。
Aできた(20%) B少しできた(40%) Cあまりできなかった(26%) D全くできなかった(0)
E無回答(14%)

- A・日常の場面をその都度取り上げて、当てはまる事項について指導できた。
・「THRIVE」は視覚的にイメージしやすく、導入として積極的に活用した。
B・全てではないが、意識をした行事を企画・実行できた。
・校内にたくさん掲示することで子ども達の意識づけができた。
・まだ意識できていないし、なじみのあるものになっていない。これが足りなかつたところと感
じる。
・教室掲示の際に少し触れた程度で、普段の教育活動で生かすことはできなかった。

- ⑦ 取組みを進めていく上で困難を感じた点はあるか。

- ・5大栄養素についてあまり意識できなかった。授業の般化での扱い方について今後話合いや共有をし
ていくことが必要だと感じた。
・レジリエンスの授業の教材作りが大変だった。
・生徒の実態に合わせて授業づくりをする際に、ねらいを理解した上でアレンジしていくことが難しか
つた。

⑧ 小中一貫校でポジティブ教育プログラムにどのように取り組んでいきたいか。

- ・小中間でサポート活動を意図的に取り組んでいけると良い。
- ・9年間の見通しをもってプログラムの実践に取り組むことや小中連携を図れると良い。
- ・小中一貫校の核となる研究の柱として継続していきたい。
- ・本校の目指す生徒像とポジティブ教育の目指すところが一致しており、学校の教育目標を実現していくためにもこの活動を定着していきたい。
- ・地域や校外に取組みを発信していきたい。

ポジティブ教育推進者を対象にアンケート調査を行った。枠内は主な理由のみ取り上げる。

① ポジティブ教育推進者会は、4校でポジティブ教育を進めていく上でどのような効果があったか。

- ・新しい学校でどんな子どもを育てていきたいかという目標に向かって、実践内容をそろえたり、意識を共有したりするのに効果があったと思う。
- ・小中一貫校の目指すところを確認する場となった。他校からの情報をもらうことで不安な点が解消でき、分からないことは所員からのアドバイスをもとに解決することができた。
- ・小学校は小小連携を取りながら進めており、小学校と中学校をつなぐという意味では効果があった。

② 推進者として、校内で取組みを進めていく上で困難を感じた点があったか。

- ・全員がポジティブ教育の必要性を感じて取り組んでいくこと、負担感を感じずに取り組んでいくこと、この二つが困難だと感じた。
- ・それぞれの学年やクラスでの取組みを把握するのが大変だった。
- ・ポジティブ教育の目的や内容、効果についての認識がそろわず、推進者として発信力を高めていかなければならないと感じた。

(2) ASSESS の結果

児童・生徒の変容を見取るために、小学4年生～中学校3年生を対象に ASSESS（学校環境適応感尺度）を用いた。その中の友人サポート因子（友人関係が良好だと子ども自身が感じている程度）および非侵害的關係因子（友達から無視や意地悪などをされていないと子ども自身が感じている程度）に着目した（資料4・5）。ASSESS の適応の指標は、偏差値と同じような性質をもち、平均的な適応状態を 50 とする。小・中学校ともに ASSESS の結果から友人サポート因子および非侵害的關係因子について、どの学年においても数値は維持またはある程度上昇との結果となり、児童・生徒に望ましい変化があったことが示された。

資料4 友人サポート因子

	1年		2年		3年	
	6月	12月	6月	12月	6月	12月
中学校	59	61	60	63	59	60

	4年		5年		6年	
	6月	11月	6月	11月	6月	11月
小学校①	53	51	60	65	53	58
小学校②	51	54	58	65	51	51
小学校③	63	83	83	83	83	83

資料5 非侵害的關係因子

	1年		2年		3年	
	6月	12月	6月	12月	6月	12月
中学校	66	68	63	66	65	64

	4年		5年		6年	
	6月	11月	6月	11月	6月	11月
小学校①	61	61	65	68	70	64
小学校②	54	58	67	66	48	55
小学校③	67	75	83	83	83	83

(3) 考察

教員を対象としたアンケート調査および各校で実施している児童・生徒への調査の結果から、以下の3点の考察を行った。

① ポジティブ教育推進者会

ポジティブ教育推進者会を受けて、推進者が各校で中心となって実践していくようにしたことで、目指す児童・生徒像を見据えて実践内容をそろえたり、意識を共有したりすることができた。また、各校の実践を推進者から紹介し、成果と課題を共有していくことで、推進者の実践意欲が高められ、各校の実態に合わせた取組みにつながったと考えられる。さらに所員がポジティブ教育推進者会に加わることで、各校の課題やニーズに応じた支援が可能となった。推進者を中心に実践を進めたことで、小中一貫校における推進体制の素地を作ることができたと言える。

課題としては、各校での取組みについて情報交換に留まったと感じる教員が多く見られ、ポジティブ教育推進者会を中心に小中連携や小中連携の視点から、同じ目的をもって他校と協働して取り組むことの困難さが挙げられた。推進者が組織全体に伝達したり、運営面で調整したりすることに負担感が見られた。これらの課題を受けて、小・中学校間で協働して取り組めるように推進体制をより強化し、引き続き所員も加わって、運営の支援を充実させていく。

② 継続的な研修の実施

今年度、各校での研修と菱田教授によるオンラインでのポジティブ教育研修会を実施したことで、教職員全員がポジティブ教育についての理解を深め、共通理解をもつことができた。また、各校のニーズに応じた研修を行うことで、児童・生徒への接し方や声かけ、活動への取組みなど、具体的に日々の教育活動に生かすことができたと考えている。今年度はコロナ禍のため計画していた研修を実施することが困難であったが、オンラインでの研修や講義を録画したDVDの配付による研修を行うなど、実情に合わせて研修の在り方を工夫することで、途切れることなく支援を継続させていくことができた。継続して研修を積み重ねることで教員の理解は深まっていると考えている。

一方で、「5大栄養素」や「THRIVE」を意識した教育活動については、不十分だと感じている教員が全体の約3割で見られた。3年目となる来年度は、プログラムの授業実践だけでなく、「5大栄養素」や「THRIVE」を意識した教育活動の展開に向けての研修や、一貫校としての実践のニーズに応じた研修を実施していく。

③ 教員によるプログラム実践の支援

昨年度取り組んできたソーシャルスキル・トレーニングやピア・サポートトレーニングを生かしてピア・サポート活動を意図して行うことにより、教員自身がピア・サポートのよさや実践の仕方を理解することができ、実践意欲は高まっていると考えている。また、児童・生徒に温かい雰囲気が生まれ、よ

りよい関わりができるようになってきた。各校でピア・サポート活動を充実させたことは、思いやりのある集団づくりにつながった。今年度、すべての児童・生徒がピア・サポート活動を経験したことで、統合後の集団形成にも生かすことができると思われる。来年度は、特に小中一貫校の特色を生かし、小・中学校間でピア・サポート活動の充実を図ることで、学校全体にその効果を循環させていくことが期待できると考える。そのために所員は、教員と共に実践と省察を積み重ね、よりよいフィードバックをしていく。

レジリエンス教育のプログラムでは、各学校で研究会を重ね、授業実践を行うことで、プログラムの必要性や理解が深まった。また、実践を通して、児童・生徒、教員が共に自己を見つめ、学んだことを生かして物事を捉えるようになってきている。特に中学校では、生徒理解の充実につながったという振り返りが見られた。校内全体で授業研究を進めていくことで教員の授業力向上にもつながった。一方で、児童・生徒の実態を踏まえ、指導案のねらいに応じたアレンジの検討や教具の工夫に時間がかかったため、教員に負担感が見られた。今年度の実践記録と作成した教具、教材等を来年度に引き継ぎ、教員がより主体的に実践に取り組むことができるようにサポートしていく。さらに、小中一貫校でも学校全体での授業研究を進め、9年間を見通したプログラムの実践について小・中学校間で理解を深められるよう継続的な支援をしていく。

小中一貫校では、「他とのかかわりの中で新たな課題を持ち、よりよい自分へと向かう生徒」の育成を目指している。校区全体でピア・サポート活動とレジリエンス教育のプログラムの実践に取り組んだことは、目指す生徒像の具現化に向けて一定の成果が見られた。来年度の小中一貫校において、プログラムの実践が日常生活や学校行事等で児童・生徒にどう生かされているか、小・中学校のつながりの中で検証していきたい。

Ⅲ 今後の取組み

4校が一つの一貫校に統合するに当たって、福井県版ポジティブ教育プログラムが有効な手立てとなると考え、実践を積み重ねてきた。1年目は、校区全体で同じ価値観をもって取り組めるように、所員による授業実践および研修を積み重ねることでプログラムの理解を深めた。2年目となる今年度は、ポジティブ教育推進会を機能させ、各校の教員が児童・生徒の実態を踏まえて実践する年とし、それぞれの学校のニーズに合わせて支援を行った。特に今年度は、「目指す生徒像」を見据えながら、教員が意欲的にプログラムの実践に取り組む姿が多く見られた。これまでの実践による成果と課題を踏まえて、3年目の方向性を2点示す。

第一に、小中一貫校での推進体制をより機能させていくための支援を行うことである。来年度の研究体制におけるポジティブ教育部に所員も参加し、小中一貫校としての実践のニーズを聴き取り、効果的な支援につなげていく。さらに、9年間のレジリエンス教育の学びのつながりの理解が深まるよう、小中連携を意識した授業研究の支援と研修を行っていく。

第二に、小中一貫校および地域の特色を生かしたカリキュラムマネジメントである。持続可能な取組みとしていくためにも、「5大栄養素」や「THRIVE」を意識して教育活動を展開し、学校や地域の特色を生かした実践を組み立てていく。開校となる来年度には、小学1年生から中学3年生までの児童・生徒が同施設内にいるという、施設一体型の一貫校ならではの強みがある。この強みを生かした、9年間を見通したポジティブ教育の実践に向けて、9年間のカリキュラムの中に、小学1年生から中学3年生までの児童・生徒の関わりを意識したピア・サポート活動の位置づけや、地域の特色を生かしたポジティブ教育の組み込みを提案していく。

統合後には、福井県版ポジティブ教育プログラムが共通の学校づくりの指標の一つとして有効な手立て

となったかどうかをさらに検証していく必要がある。2年間の実践を踏まえ、小中一貫校の強みと教員の主体性を生かした実践へとつなげていけるように効果的な支援をしていきたい。

最後に、本実践のためにご協力いただいた小・中学校の教職員の皆様、ご指導いただいた立命館大学教職大学院の菱田準子教授にこの場を借りて心より厚くお礼申し上げます。


《参考文献》

- 菱田準子 (2018~2019) 『ポジティブ心理学で学校づくり』ほんの森出版
- 栗原慎二・井上弥編著(2015) 『アセスの使い方・生かし方』ほんの森出版

資料1 5大栄養素


心・からだ・しあわせな人生をつくる「5大栄養素」

「4 Pillars of the Choose Love Program」に喜びを追加




勇気
COURAGE

はずかしいことやこわいこと、めんどろなことがあっても、逃げないでよい方向に一步ふみだすことを学びます。




感謝
GRATITUDE

ありがたいと心から思い、人生の中でつらいときでも感謝（かんしゃ）の気持ちを持ち、いきいきできることを学びます。




ゆるし
FORGIVENESS

他の人や自分に嫌な気持ちを持ち続けることをストップし、エネルギーをよい方向に使うことを学びます。



思いやり
COMPASSION

他の人や自分が傷ついていることに気づき、傷をやわらげたり、困っていることを解決したりすることを学びます。



よろこび
JOY

他の人のよろこびを自分のことのように感じることや、他の人といっしょに何かをするよろこびを学びます。

Happiness Wave with LOVE

資料2 THRIVE



スライブ

持続可能な幸せを育む知恵 **THRIVE (繁栄・成長)**



Thinking Mindful	Healthy Coping	Relating Well	In the Moment	Values-Driven Actions	Emotions of Positivity
学ぶ人	健康な人	思いやりのある人	今に集中する人	変革する人	ポジティブな人
失敗は成長のチャンスと考えます	よく食べ、よく動き、よく寝ます	困ったときには「助けて」と言います	過去や未来でなく、今することに集中します	安心・安全をつくれます	すごい自分を実感します
ネガティブな感情から大切なことを学びます	ストレスに上手に対処します	人の話によく耳をかたむけます	夢中になれるものがあります	仲間と課題を解決します	希望をもって物事に取り組みます
自分を成長させる考え方をします	支えられて生きていることを実感します	自分にも誰に対してもやさしくします	あやまちをゆるします	まわりをよりよくすることに取り組みます	ポジティブな気持ちをたくさん作れます

Happiness Wave with LOVE

資料3 R2年度角鹿中学校区での実践内容

月	主な取組み	角鹿中学校	敦賀北小学校	赤崎小学校	咸新小学校
4					
5	<ul style="list-style-type: none"> ・ポジティブ教育研修会「ポジティブ教育の概要」(DVD視聴) ・通信講座研修「ピア・サポートについて」視聴 	<ul style="list-style-type: none"> ・ASSESS研修会 			
6					
7		<ul style="list-style-type: none"> ・ポジティブ教育研修会「学校行事を生かしたピア・サポート活動について」 ・体育大会でピア・サポート活動 			
8	<ul style="list-style-type: none"> ・ポジティブ教育推進者会① ・ポジティブ教育研修会「ポジティブ教育の進め方」(遠隔) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ポジティブ教育研修会(レジリエンス授業の実践に向けて) ・授業検討会 	<ul style="list-style-type: none"> ・ポジティブ教育研修会(ピア・サポート活動、レジリエンス授業の実践に向けて) 	3小合同打合せ(授業実践に向けて)	
9		<ul style="list-style-type: none"> ・レジリエンス授業実践 ・修学旅行でピア・サポート活動 		<ul style="list-style-type: none"> ・ポジティブ教育研修会(ピア・サポート活動の概要とプランニング) 	<ul style="list-style-type: none"> ・異学年交流、校外学習、宿泊学習でピア・サポート活動 ・ポジティブ教育研修会(ピア・サポート活動についての質疑応答)
10		<ul style="list-style-type: none"> ・レジリエンス授業実践 	<ul style="list-style-type: none"> ・レジリエンス授業実践 ・体育大会でピア・サポート活動 	<ul style="list-style-type: none"> ・レジリエンス授業実践 ・体育大会でピア・サポート活動 	<ul style="list-style-type: none"> ・レジリエンス授業実践 ・体育大会でピア・サポート活動
小小合同授業の実施(小6)					
11		<ul style="list-style-type: none"> ・レジリエンス授業実践 ・レジリエンス授業研究会 	<ul style="list-style-type: none"> ・レジリエンス授業実践 	<ul style="list-style-type: none"> ・レジリエンス授業実践 ・レジリエンス授業振り返り 	<ul style="list-style-type: none"> ・レジリエンス授業実践 ・レジリエンス授業研究会
12	<ul style="list-style-type: none"> ・ポジティブ教育推進者会② 	<ul style="list-style-type: none"> ・学年レクリエーションでピア・サポート活動 	<ul style="list-style-type: none"> ・レジリエンス授業実践 ・レジリエンス授業研究会 		<ul style="list-style-type: none"> ・レジリエンス授業実践
小6に学校紹介の行事で「お悩み相談会」ピア・サポート活動を実施					